

機関番号：34304

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520530

研究課題名 (和文) 小学校における英語教育活動の長期的な効果

研究課題名 (英文) Long-Term Effectiveness of English Language Learning in Elementary Schools

研究代表者

植松 茂男 (UEMATSU SHIGEO)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：40288965

研究成果の概要 (和文)：

本研究では小学校英語活動の開始年齢が、中学校における英語学習や情意面での発達にどのような影響を与えるかを調査した。2007 学年度から 2009 学年度に得られたデータの分析によると、小学校英語活動の開始年齢が下がり、履修時間が増加すると、中 1 の英語力テスト成績がリスニングを中心に全体的に向上し、さらに中 2 のみで実施したスピーキングテストスコアも毎年大幅に向上した。しかしながら、情意面への影響はほとんど検出できなかった。

研究成果の概要 (英文)：

This study investigated the effect of the starting age of English language teaching at elementary school (ELTES) on students' subsequent English skill development and their attitudinal changes at a junior high school. The analyses of data obtained from 2007 through 2009 academic year revealed that as the starting age of ELTES lowered, hence the amount of ELTES increased, grade 1 students' English proficiency test scores generally improved, especially in listening test. The results of the speaking test conducted only in grade 2 showed that the score improved by a statistically significant degree each year, as the starting age lowered. However, few differences were detected in their attitudinal domain over the years.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：言語習得論

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育 早期英語教育

キーワード：英語特区、早期英語教育、小学校英語教育活動、英語教育、小中一貫授業

1. 研究開始当初の背景

大阪府寝屋川市は、2004 年に内閣府構造改革特別区域「小中英語教育特区」の指定を受け、2005 年度から 2007 年度の 3 年間の「英語特区」指定期間にあわせて「国際コミュニケーション科」を市内全ての小中学校でスタ

ートした。2005 年度は小学校 5, 6 年で、週 1 回ずつ年間 35 時間、中学校で通常の英語授業 (週 3 回) に加えて週 1 回ずつ年間 35 時間実施。2006 年度からは小学校 1 年生からの実施に踏み切った。実施時間数は低学年 (1, 2 年) で年間 10 時間、中学年 (3, 4

年)では年間20時間である。寝屋川市では、国際化時代を生き抜く「国際コミュニケーション力を備えた」子どもの育成を、「情報教育」とともに大きな教育目標に掲げ、英語を通して「発信型コミュニケーション力」の育成を目指すことを「国際コミュニケーション科」の目標としている。平成23年度から全国で始まった、高学年週一回導入の英語活動のさきがけのかたちと考えられる。

2. 研究の目的

筆者はこの「国際コミュニケーション科」(実質的には英語活動)の小学校への導入が、どのような影響を中学生の英語学習に与えるかを、英語スキル面・情意面の双方から観察してみようと考えた。現行(平成23年度から)の高学年週一回導入の効果と、将来的に導入学年を下げっていく場合との、双方の検証がこの特区から可能であり、何らかの示唆が得られると考えた。

3. 研究の方法

(1) 英語力指標テスト

英語スキルを測る英語能力指標テストの選定に当たっては次の4点を重視して選んだ。①1授業時間内(50分以内)で実施できるもの。②統計的に標準化されたテストであること。③日本の中学校の英語教科書・教材の内容に準拠したテスト内容であること。例えばTOEIC Bridge等は不可。④実施単価があまり高価でないもの。

以上の条件を満たす種々の英語力指標テストを調べた結果、ELPA社(Association for English Language Proficiency Assessment; 英語運用能力評価協会)のJACE(Junior High School Assessment of Basic English)テスト(Level 1; 中1修了レベル~ Level 3; 中3修了レベル)が一番上記の条件に近いと採用した。このテストは「項目応答理論」(Item Response Theory)に従って作成された標準化テストで、内容は語彙・文法(22問、100点満点)、リーディング(10問、100点満点)、リスニング(18問、100点満点)、計300点満点を45分で解く問題である。ELPA社によると、各テストの信頼性評価(reliability estimate)は、クロンバック α 値でそれぞれ、Level 1(中1)=.81、Level 2(中2)=.81、Level 3(中3)=.86である。費用は生徒1名あたり300円で、実施校の1年生から3年生までのほぼ全員($n=600-700$)が受験する。

(2) インタビューテスト

JACEテストに含まれないスピーキング力を測るため、簡単な英語の「会話」(conversation)テストと、渡した絵をもとに自分でストーリーを考え、英語で自由に語る

「ストーリー・テリング」(story-telling)テストの二部からなるインタビューテストを実施した。問題作成にあたっては、英検3級の2次テストの問題・評価シートを参考にした。実施時間は2つあわせて1名約7分程度である。インタビューテストの実施、及び採点に際しては、研究分担者及びN中学校の先生の協力も頼み、3名体制で実施した。インタビューテスト実施には時間がかかるため、受験を間近に控えた3年生や行事が多い1年生は不可能であることが判明した。その結果、JACEテスト結果が平均的なクラスを2年生から1クラス選んで実施することとした。人数は、毎年約35名である。

(3) 情意アンケート及び英語に関する質問

情意アンケートは、過去のアティチュード(情意)、モチベーション(動機)研究の文献・アンケートを参考に作成した60項目を、パイロットテストで主成分分析し、23項目のコンパクトなものにした。これはホームルーム(10-15分)等を使って短時間で実施できるようにという学校側からの要望に配慮したためである。

さらに英語学習経験に関する質問(渡航歴、英会話教室の経験など)も7項目加え、合計で30項目となった。回答に要する時間は約15分である。情意アンケート項目については全て「1:全くそう思わない 2:そう思わない 3:どちらとも言えない 4:そう思う 5:強くそう思う」の5択でマークシートに回答してもらった。

(4) 実施時期・形態について

2007年度から2010年度の研究終了年まで、寝屋川市立N中学校の1年生から3年生まで約700名を対象に、調査を毎年学年末同時期、3月上旬に実施した。内容は、各学年とも上記JACEテスト、アンケートである。インタビューテストに関してのみ、上述のように毎年2年生から1クラスを選び学年末に実施した。

4. 研究成果

N中学校側の都合で、2010年度(2011年3月)は、予定していたテスト・アンケートが急遽一切実施不可能になった。従って2007年度から2009年度のデータ比較に於いて得られた次のような知見を、2010年度かわりに実施した教員・児童・生徒に対するインタビューをデータ解釈の参考に資して、研究成果として報告したい。

(1) JACEテストによる英語スキル1年生に関しては、語彙・文法、リーディング、リスニングの3項目で2009年度の中1生が

3項目全てで2007年度生、2008年度生を上回った。これらを説明する理由の可能性として以下が挙げられる。

・小英開始時期が4年生になり、総履修時間が20時間増えて90時間になったため。

・卒業後1年しか経過しておらず、小英の経験がまだ効果的に働いているため。

・小中連携が以前よりスムーズになっており、うまく中学校英語に適応しているため。

・2009年度生が基礎学力に優れた学年であるため。

もちろん、研究側としては一番目の理由に特に注目しているが、上記他の要因による影響も否定することはできない。

(2) 上記JACEテスト結果の中でも、リスニングスコアが年次ごとに学力差があるにもかかわらず、中学校1年生では毎年向上していることは注目に値する。

(3) JACEテストに関して、2年生は2008年度生が全てで他の年度の平均を上回った。つまり、小学校英語活動による効果は少なくとも卒業2年後には見えにくくなっている。

(4) 一方で、中2の1クラスのみを対象に実施したスピーキング(インタビュー)テストでは、2009年度生が2008年度生を、2008年度生が2007年度生を有意なスコア差で上回った。積極的に「話す」ことは、本来、寝屋川市の国際コミュニケーション科のカリキュラムの大目標であるので、これが達成され、年々その効果があがってきている証であろう。(2)の1年生のリスニングのスコアの年次ごとの向上と共に、寝屋川市の小学校英語活動の大きな成果である。

(5) JACEテスト3年生はリスニングを除く全てで、小学校英語活動が一番少ない(0-12時間)2007年度生が、他年度を凌いだ。この時点(卒業後3年経過)ではもはや小学校英語活動の長期的効果を検証するのは困難である。結果は、N中の教員が語るように、2007年度生が抜群に学力が高かったことを示唆していると言えよう。

(6) 情意アンケートに関しては、中1が「英語学習に対する考え方」(5項目)で2008年度生が2007年度生を統計的有意に下回った以外、中2、中3では両学年とも5要因23項目で2009年度生、2008年度生、2007年度生間で有意差はなかった。年次ごとに数値が大きく変動することは、あまりなかった。

まとめると、今回の調査研究では、中学1年における全体的なスコアアップ、特にリスニングスコア、中学2年におけるスピーキン

グスコアの3年連続の伸長が確認された。すなわち小学校英語活動が、中学校2年生頃まで生徒のスピーキングスコア、中学1年生頃までリスニングスコアに何らかの効果を及ぼしていると考えてよかろう。年次ごとの得点の増加は、開始学年の早期化(小4)や総指導時間数の増加(90時間)だけでなく、小中連携の充実を意味するものと解釈するのも可能であろう。一方、小学校英語活動で扱わない語彙・文法力、リーディング力に関しては長期的な効果は認めにくい。また情意面に於ける年次ごとの変化もほとんど検出できなかった。

従来の研究では、情意アンケートの結果に関して、「順序尺度」(ordinal scale)(例:5:強く同意する、4:同意する、3:どちらとも言えない、2:同意しない、1:全く同意しない)による回答を便宜上、「間隔尺度」(interval scale)と見なし、スキルテスト結果(間隔尺度)との相関を調べるのが主流であった。本研究では、アンケート結果を「ラッシュ分析法」(Rasch Analysis)を使い標準化した上で、「質問項目信頼性」(item reliability)、及び「回答者信頼性」(student reliability)、「天井効果」(ceiling effect)などをチェックしながら統計処理を行った。こうした心理統計学的(psychometric)な手法を用いた点でアンケートによって情意面ではこれまでと異なる知見が得られたと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①植松茂男 「特区における小学校英語活動の長期的効果の研究」、京都産業大学 教職研究紀要、査読有、第6号 2011, pp.19-42.

②植松茂男 「バイリンガルであること」 教育と医学 (2011年4月号)、依頼原稿(査読無)、第59巻4号、慶応大学出版会、2011、pp. 39-47.

③Shigeo Uematsu, "The Effect of English Learning in the Elementary School on Students' English Language Skills and Their Affective Variables at the Junior High Schools" *JACET Journal*, 査読有 Vol. 50, 2010, pp.49-62.

④植松茂男 「早期英語学習がその後の英語技能に与える影響について(学校間差、性差、英語塾経験等の考察)」 *Setsunan Journal of English Education (SJEE)*、査読有、Vol. 4, 2010, pp.105-117.

⑤ Shigeo Uematsu, "Reviewing the Research Investigation the Subsequent

Effect of English Learning at Elementary Schools in Japan”, SJEE (Setsunan Journal of English Education), 査読有、Vol. 3, 2009, pp. 51-72.

⑥ Shigeo Uematsu, “Long-Term Effectiveness of English Language Learning in Elementary Schools (The Japanese Elementary School Context).” *Journal of the Japan Association for Developmental Education*, 査読有、Vol. 4 (1), 2009. 108-115.

⑦ 植松茂男「台湾の小学校英語教育の現状と課題」 *Setsunan Journal of English Education (SJEE)*, 査読有、Vol.2, 2008, pp.167-183.

〔学会発表〕(計9件)

① Shigeo Uematsu, *Is there any effect of ELTES on the subsequent EFL learning?* IX Annual Worldwide Forum on Education and Culture, 2, December, 2010, Rome, Italy.

② Shigeo Uematsu, *Is there any effect of ELTES on the Japanese EFL learning?* The PALA International Symposium. 20, September, 2010, University of Western Sydney, Australia.

③ 植松茂男、「小学校英語教育の長期的効果について」、大学英語教育学会、2010年9月7日 宮城大学(仙台市)

④ Shigeo Uematsu, *Teaching English at Elementary Schools in Japan*, CamTESOL 2010, 27, February 2010, Phnom Penh, Cambodia.

⑤ Shigeo Uematsu, *The Long-term Effectiveness of English Instruction at Elementary Schools*. JALT 2009, 2009年11月19日、静岡コンベンションホール(静岡県)

⑥ 植松茂男、「小学校英語教育の長期的効果について」大学英語教育学会、2009年9月5日 北星学園大学(札幌市)

⑦ Shigeo Uematsu, *A Long Term Effectiveness of English Language Instruction at Elementary Schools*, CamTESOL 2009, 28, February 2009, Phnom Penh, Cambodia.

⑧ 植松茂男、「小中一貫教育と小学校英語」寝屋川市教育委員会講演会、2008年1月30日、桜小学校(寝屋川市)

⑨ 植松茂男、「台湾の早期英語教育の現状と課題」関西 JACET 講演会、2007年12月15日、京都コープイン(京都市)

〔図書〕(計1件)

Shigeo Uematsu, "The Long-term Effectiveness of English Language

Instruction at Japanese Elementary Schools" *Ann Arbor MI, UMI/Proquest*. 2010, 224.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植松茂男 (UEMATSU SHIGEO)
京都産業大学 文化学部 教授
研究者番号：40288965

(2) 研究分担者

里井久輝 (SATOI HISAKI)
摂南大学 外国語学部 准教授
研究者番号：70388643

(3) 連携研究者

()

研究者番号：